

園のおたより



第 11 号

令和 7 年 3 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

卒園式



園長 関 由起子

3組の皆さん、そして保護者の皆様、卒園誠におめでとうございます。至らぬ点多々ありましたが、保護者の皆さまと共に子どもたちの「自らの力」を支えることができ、私たち教職員にとっても大変喜び深い日々でした。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

この喜ばしい記念すべき卒園ですが、私は園長として最後まで卒園式をやり遂げる事ができるのか、不安でたまりませんでした。なぜなら、私は娘の卒園式で、式のはじめから最後まで泣き通し、とても言葉を発することなど出来ない状態だったからです。

娘が通った保育園の卒園式では、保護者が一人ずつ自分のこどもに「卒園を迎えて」という手紙を読み渡すのです。Aちゃんママ、Bちゃんママ・・・と手紙が読まれるたびに自分の思いを重ねて泣き、自分の番では声が涙声でひっくりかえったり、つまったり、言葉が出なかったりと大変恥ずかしい思いをしました。せっかく卒園児の保護者として着飾って来たのに、化粧も剥げ、涙と鼻水で顔はぐしゃぐしゃでした。娘からは式の最中から「なんで泣いているの？ 泣いているね、なんで？」と質問攻めにあいました。このような状態になったのは、6年間の親としての苦労、親と子を今まで支えてきてくださった先生方へのお礼と、こんな親のもとでも元気に育ってきた娘への感謝などの感情がぐちゃぐちゃに入り混じり、それが涙と鼻水として体外に放出されたからでしょう。それ以来、「卒園」という言葉を聞くだけで、涙が出る体質となってしまいました。その後の「卒業式」では恥ずかしくなるほどの涙は出ませんでしたので、「卒園」は私にとって特別な意味があったのだと思います。

さて、昨年度の卒園式ですが、私の不安を感じ取ってくれたのか、A先生が涙を抑える方法を教えてくれ、卒園児と一緒に式の練習をしながら同時に私は涙を抑える練習し、本番でも無事に卒園児を送り出すことが出来ました。お蔭で少しだけ卒園式への不安が弱まりました。今年度も27人の卒園児の顔を見ると、2年間の思い出が数々こみ上げてくると思います。けれども保護者の皆様の方が、約6年分の思いが押し寄せてくるのではないのでしょうか。皆様のための式であることを心に固く誓い、立派に成長した子どもたちに恥じぬよう、しっかりと送り出していきたいと思います。何卒よろしく願いいたします。

